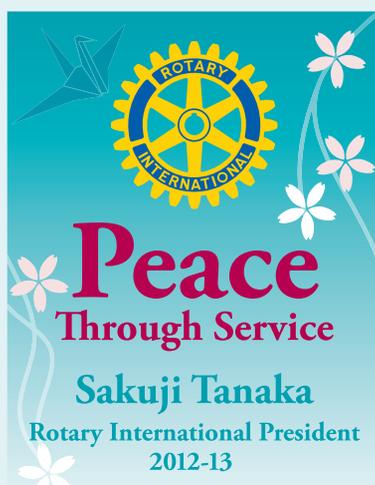


国際ロータリー第 2790 地区第 2 分区  
インターシティ・ミーティング（合同例会）

# 平和フォーラム

報告書



2013年2月20日（水）15時～19時半  
フローラ西船7階ホール（船橋市西船橋駅前）

## 第2分区IM2013「平和フォーラム」を終えて

R I D 2790 第2分区ガバナー補佐 浜名 賢一

皆さま第2分区インターシティーミーティング(IM)「平和フォーラム」へのご参加ありがとうございました。私は1年半前、ガバナー補佐に指名されたとき、「平和」をテーマにしたIMをしたいと考えました。なぜなら「ロータリーの究極の目標は世界平和である」と常々聞かされ、また私自身の少年時代からの人生のキーワードが「平和」であったからです。田中作次国際ロータリー(RI)会長の年度テーマ「奉仕を通じて平和を」に後押しされ、また第2分区6クラブの皆様にご協力を頂いて、IMを「平和フォーラム」として開催することができました。心より御礼申し上げます。

講師の田岡さんは、「政治から自由であり、かつ影響力を持つ人々の世界的連合体である国際ロータリーは、平和に向けて重要な役割を果たすことができる」と期待を語ってくださいました。私たちはいつもそのように思って行動しているでありましょうか。ロータリアンが何なのかをあらためて指摘されたような気がいたします。目からうろこのお話もございました。凝り固まった先入観なしに、私たちはロータリアンとしての日々を送りたいものです。田岡さんにはパネルディスカッションのパネリストもお務めいただきました。本当にありがとうございました。

パネルディスカッションは、5月の広島でのロータリー平和フォーラムのテーマ「平和はあなたから始まる」につながる内容の議論をお願いしました。パネリストの平塚さんにはロータリー平和フェローとしての実績に基づくご提案やご意見を、青木さんにはロータリー平和フェローだけでなくロータリー財団委員会での経験からにじみ出るお話を、平野さんにはクラブの会報・雑誌・広報・IT委員長として日本中のクラブの情報を集めて紹介をしている中で生み出されたご意見を、それぞれのお立場から、具体的な提案としていただきました。心より感謝申し上げます。皆さまのご発言を聞いていて、平和を意識することで奉仕の幅が更に広がると感じました。

コーディネーターをお願いした二神さん。地区のセミナーなどでパネリスト、コーディネーター、講師、そして今回またコーディネーターと、これは私がお願いした

4回目のお役目でした。ほかにも取材や記事の掲載など、数え上げられぬほどお世話になりました。「ロータリーの同志」である二神さんに、あらためて御礼を申し上げます。

家庭の平和も世界平和も、①出会い、②知り合い、③理解し合うことから始まると言われています。私たちだけではなく、特に若い人たちが世界に仲良しのネットワークを作る手助けをすることは平和への大きな力になります。戦争が起これば、地域社会や家庭の平和も吹き飛びます。ロータリアンの知恵と若い人たちの力を「武力に頼らない防衛・平和」へと繋げたいものです。

「平和」という言葉は多様な意味があるからという理由で抽象的に考えられがちです。平和ボケという言葉があるくらい、平和な日常があたり前になっている日本の中で私たちは暮らしています。少なくとも戦争の危険に直接さらされていないのですが、だからと言ってこのまま安閑と暮らしていてよいはずはありません。テロや核の恐怖、原発事故、大地震、治安の悪化……課題はたくさんあります。これらに対する具体的な行動は身近にくくつもあるとあらためて思いました。「新世代」や「ポリオ撲滅」などをキーワードに「平和」を意識した奉仕を実践したいものです。

講演で田岡さんからは、尖閣の問題をこのままにしていると、戦争を起しかねない状況にあるとの指摘がありました。レーダーによる照射が何か特別な事態であると報じ、対抗措置を唱え、エスカレートしていく先にあるものは何か。その目的は何か。死の商人たちと結びついた政権に任せておいてよいのか、との思いが募ります。対抗措置が軍備強化であるならば、その行き着く先は平和ではなく、戦争にしかありません。そもそも平和のための戦争など現代の世界ではありえないのです。戦争に勝利したとして、敗者には恨みや怨念が残ります。「昨日の敵は今日の友」は幻想にすぎません。必然的に次の新たな戦争へとつながってゆきます。しかもその過程で軍人にも一般人にもかなりの数の犠牲者が出ます。軍備ではなく外交力の強化を進めるべきだと私は考えています。外交はもちろん第一義的には政府の仕事ですが、民



だったが、内容的にも形式的にもあのようなIMに挑戦したのは良かったのではないかとのお話をいただきました。また別の方からは「難しいテーマでしたね」との感想をいただきました。「テーマが難しかった」ではなく「難しいテーマでしたね」というところに私はほっとした気持ちになっています。

IMの最後に、前任ガバナー補佐の鈴木正さん（船橋みたとRC）に得居ガバナーからの感謝状をお渡しし、

次期ガバナー補佐の森嶋康長さん（船橋RC）にご挨拶をいただきました。分区の発展を願い、各クラブの皆さまの友情が引き継がれていくであろうことを実感しております。

懇親会では講師・パネリストの皆さまを交えて、懇親が図られたことと思います。出会い、知り合い、理解しあう「平和」を、第2分区の中から築いてまいりましょう。ありがとうございました。

間外交という言葉があるように、私たちが民間人の立場でできることもかなりあります。田岡さんのお話にもあった「国境を超えた平和」「地域社会で在留外国人との交流」「国際感覚と交渉力を身につけた新世代の育成」などはロータリーが得意とする分野です。

また、私たちはロータリークラブの一員であると同時に、クラブを通じて国際ロータリーの一員であることを忘れてはならないと思います。日常の暮らしを考えると国際ロータリーは遠い存在かもしれませんが、しかし、明らかに私たちはロータリアンであるとすれば、私たちの根源は国際ロータリーにあります。クラブを超えて、分区や地区だけではなく国際ロータリーの世界を意識して行動すべきだし、そうする権利を私たちは持っています。このことを皆、たぶん頭ではわかっていることでしょう。

平和が日本では当たり前のような、空気のような存在になっています。田岡さんが語られた戦争や紛争の世界は私たちから遠い存在でありましょう。しかし、この平和は一瞬にして壊されるかもしれないものだということを認識せねばなりません。平和は黙っていて守られるものでないことは、皆、頭では理解しているはずです。過去の歴史がそれを物語っているし、現実の状況として平和ではない世界に身をおくしかない人たちも多いのです。また、「平和」は国家間や民族間の争いのない社会、という風に限定しないとぼやけてしまっても見えてこなくなります。戦争や紛争で平和な暮らしは吹っ飛んでしまうことを考えれば、戦争の対極にある「平和」実現のために今何をせねばならないかが、明確になってくるのではないのでしょうか。

このIMを終えて、参加したある方から「不完全燃焼

### 第2分区IM参加者数

クラブ名	会員数	参加者数	懇親会参加
船橋	25	15	11
船橋西	44	26	10
鎌ヶ谷	25	18	17
船橋東	26	15	13
船橋南	21	18	18
船橋みなど	24	15	13
小計	165	107	82
講師・パネリスト		3	3
ビジター		3	3
事務局		6	3
合計		119	91

## プログラム

司会 分区幹事 石井 博 (船橋南RC)

- 14:30 受付開始
- 15:00 点 鐘……………ガバナー補佐 浜名 賢一 (船橋南RC)  
国歌・ロータリーソング『奉仕の理想』斉唱ソングリーダー……………穴戸 久子 (船橋南RC)  
開会挨拶・講師・パネリスト等紹介……………ガバナー補佐 浜名 賢一 (船橋南RC)
- 15:15 講演「奉仕を通じて平和を・ロータリアンへの期待」 講師 田岡 俊次 (ジャーナリスト)
- 16:05 休 憩
- 16:15 パネルディスカッション 「奉仕を通じて平和を・今、ロータリアンにできること」  
パネリスト 田岡 俊次 (ジャーナリスト)  
平塚 広義 (ロータリー平和フェロー)  
青木 忠茂 (船橋RC)  
平野 信夫 (船橋南RC)  
コーディネーター 二神 典子 (ロータリーの友編集長)
- 17:40 感謝状・記念品贈呈 鈴木 正 直前ガバナー補佐 (船橋みなとRC) へ  
次年度ガバナー補佐紹介、挨拶 (分区内各RC会長エレクト・次期分区幹事紹介)  
次年度ガバナー補佐 森嶋 康長 (船橋RC)  
次年度ホストクラブ会長エレクト挨拶 狩野 文夫 (船橋RC)
- 17:55 お礼の言葉・点鐘 (18:00) …………… ガバナー補佐 浜名 賢一  
(休憩・3階へ移動)
- 18:10～19:30 懇親会 司会 川原 義光 (船橋南RC)  
開会挨拶……………ホストクラブ会長 田中 一邦 (船橋南RC)  
乾 杯……………パストガバナー 佐川 一元 (船橋南RC)
- 18:40頃 若干名にインタビュー……………インタビュアー 平野 隆幸 (船橋南RC)  
お楽しみ抽選会……………平野 隆幸  
(船橋南RC・親睦委員会)
- 19:25 手に手つないで……………ソングリーダー 穴戸 久子 (船橋南RC)
- 19:30 閉会挨拶……………ホストクラブ会長エレクト 桜丘けい子 (船橋南RC)



講演

## 「奉仕を通じて平和を・ロータリアンへの期待」

— 「国境なき平和」を考える —

軍事評論家 田岡 俊次

今回のインターシ  
ティミーティング  
のテーマ「奉仕を通  
じて平和を いま  
ロータリアンにでき

ること」はお答えするのが難しい課題で、実は途方に暮れました。世界平和への筋道が明確だと、それに沿う奉仕ができれば、古代ギリシアや中国の春秋戦国時代以来、多くの学者や宗教家らが平和のための提案をしてきたものの、有効な名案はありませんでした。

国家間の利害対立を戦争でなく裁判で解決するための「常設仲裁裁判所」は1902年にオランダ・ハーグに設立されましたが、1914年に第1次世界大戦が始まり、軍人850万人、民間人1,300万人が亡くなりました。大惨事を繰り返さないよう1920年に国際連盟が生まれて58か国が加盟し、1928年の「不戦条約」には63か国が署名しましたが、1939年に第2次世界大戦が起き軍人1,900万人、民間人約4,000万人が命を失いました。

二度と戦争がないように、と国際連合が1945年に発足しましたが、5大国が拒否権を持ち、それらが対立して核軍備競争をし、人類を何回も消滅させることが可能なほどの核兵器を貯えました。安全保障理事会の自国に都合な決議は拡大解釈して武力行使の口実とし、不都合な決議案は拒否したり、イラク戦争のように武力行使決議が認められないと、「必要な行動をとるのに国連の許可を得る必要はない」と公言して戦争を始めて大失敗をしたりしてきました。

多くのロータリアンが途上国の開発を助けられ、ポリオ撲滅など、住民のために献身的な努力をされていることには感服していますし、開発自体は良いことなのですが、開発が平和をもたらすとは限りません。第1次、第2次世界大戦などの例を見ても、大戦争は豊かな先進国間で起こり、工業力が巨大なだけに甚大な被害を与えました。

「すべての国を抑圧、差別のない民主国家にすれば世界は平和になる」との説はアメリカで強く、アフガニスタン、イラクでの戦争も「民主化」を目標に掲げました。しかし、当のアメリカは第2次世界大戦後、小規模な武力行使や派兵を除いて、7回の戦争をし、その度に当

初は大統領の支持率がはね上がりました。イギリスの帝国主義が頂点に達した19世紀末は、英議会政治の最盛期でもありました。

日本でも1925年、25歳以上の男子ほぼ全員に選挙権が与えられましたが、対外強硬論が強まり、急速に軍国主義に向かいました。他国の非を唱え、威勢がよく、わかりやすい強硬論は大衆の喝采を博します。一方、長期・大局の利害を考え、妥協、協調を図る対外政策は事情通には評価されても、大衆には「弱腰」と言われやすいものです。国内問題では国民大衆に事情がわかりますから、賛否の論を戦わせ、多数決で決める民主主義は、まず無難、他の政体より「まし」ですが、対外問題での多数決は互いに一方の側だけ、断片の情報による多数決ですから、対立が激化しがちです。民主制は横転しやすい車のようで、慎重に運転する必要があるでしょう。

平和のために「いまロータリアンにできること」は何か、と考えあぐねるうち、『ロータリーの友』で田中作次国際ロータリー会長のメッセージを読み、その中に「国境なき平和」の語句があるのを見て「これならいける」とひらめきました。

「国境なき平和」を理想主義、空想的平和主義と感じる人も多いと思いますが、現実には世界は急速にボーダーレス化が進んで、国境の意味は薄れつつあります。その方向に努力するのは、流れに沿って船をこぐようで、長期的には成果が上がるはず、と考えました。口では「ボーダーレス」グローバル化を言う人は多いのですが、大多数の人はいまなお、「領土こそ国力の源」「領土は国益の最たるもの」と信じ「寸土も譲らず」の題目を唱えています。その迷妄を解けばよいと思いつきました。

領土、テリトリーの意識は、すべての動物の本能で、サルもアリもそれで争い、食べ物に不自由せずグルメで困るわが家の猫でも縄張りを争いけがをして帰ってきます。人類も狩猟・採取経済の時代にはエサ場をめぐるけんかをたててありましたが、狩猟や漁労では縄張りを仮に3倍に拡大しても3倍獲れるわけではなく、技量の方が重要になります。全員がほぼその日暮らしだから、奪い合うものもあまりありませんでした。

しかし、農耕が始まると収量は耕地面積に比例し、少し余裕もできますから、一部の者に弓や槍を携えて田畑や食料庫を見張らせ、その兵力で狩猟民を追い払い、他の

部族とも戦って領土を拡大することになりました。

縄文時代の狩猟用の矢尻は抜けないようにモドシがついた三角形ですが、日本では農耕社会になった弥生時代の遺跡からは戦闘用のナイフ型の石の矢尻が大量に出土しています。集落も佐賀県の吉野ヶ里のように、農耕には少し不便な丘の上に濠と柵をめぐらし、櫓を立てた要塞型の環濠集落が多くなりました。武器、兵士、戦争、国家は農業とともに現れたのです。

農業中心の経済は、ヨーロッパ、中国では約 7,000 年前、日本では約 2,500 年前からごく近年まで営まれ、日本の農業人口は明治初期に約 77%、1950 年でも就業者中の 45% でしたから、土地は何より大事との信仰は根強いものがあります。しかし、国内総生産（GDP）の中で農林水産業の占める比率は 2010 年に日本で 1.42%、アメリカで 1.06%、ドイツ 0.79%、フランス 1.79% に低下しました。一方、中国は 10.43%、インド 17.61%、エチオピアは 43.22% で、商工業、サービス業が主体の先進国では領土面積と国力は無関係となりました。

さらに、大企業は多国籍化し、当初の 1970 年代には進出先での低賃金労働や資源の収奪、公害などの問題が指摘されましたが、今日ではそうした批判は少なく、逆に本国側での雇用の減少や租税回避が問題となっています。工場だけでなく、設計や経理部門などの本社機能までも世界各地に分散し、材料、部品は多数の国から国際分業で調達し、役員会も多国籍、株主も消費者も世界にまたがり、登記も法人税が安いゼロの国に移しますから無国籍企業が増え、商品もどの国の製品か言えなくなってきました。蒸気機関が第一次産業革命の一大要素、重化学工業が 19 世紀後半の第 2 次産業革命の主体だったように、経済の国境を消した第 3 次産業革命にも技術的背景があると思われます。

第一は、数十万 t もの巨大なスーパータンカーや、鉱石・穀物などを運ぶ 5 万 t 程度のバルク・キャリア（ばら積み船）、荷積み・荷揚げのコストを低下させたコンテナ船などの造船技術です。スーパータンカーは乗組員約 15 人で、30 万 t、つまり 1 人当たり 2 万 t の原油を一日に約 700km 運びます。1t を 1km 運ぶ経費は約 3 銭、10t 積みのタンクローリーなら 20 円ですから、700 分の 1 のコストということになります。海上輸送のコストが極度に低下しましたから、資源が領内になくてもよくなりました。世界を見渡し最も安い原材料を買った方が有利になります。先進国内になまじ石炭や鉄鉱石の資源があると、高い労賃を払って採掘し、製鉄所も内陸にありますから、海岸にある製鉄所に比べ、運賃でも不利になります。かくして、海上の輸送量は、1948 年には 5 億 t 弱でしたが、2011 年には 90 億 t と 20 倍近くに

拡大しました。

第二はボーイング 747（ジャンボジェット）など、広胴型旅客機でしょう。1948 年初飛行の 4 発プロペラ機 DC 8 は 54 席でしたが、B 747 は最大 500 席で、航空運賃は大幅に低下し、ビジネスマンや技術者などは気楽に海外と往復、労働者も移動するようになりました。

第三の要素は、かつての大型で高価なテレタイプに代り、ファクス、インターネットが普及し、国際電話も安価で、すぐつながるなど、情報通信の飛躍的進歩です。これにより金融、証券などの海外取引も、海外の工場、販売店との連絡も一瞬で行えるようになりました。

こうして、モノ、ヒト、カネ、情報、アイデアなどのグローバルな流通が普通になると、農業時代の経済の反映である領土、国境はほとんど無意味になり、領土の大小は国力と無関係になりました。

その一例はドイツです。第 2 次世界大戦後、同国は東西に分割され、戦前の 1938 年に合併したオーストリアも分離されて西独の面積は戦前のドイツの 42% になりましたが、1950 年代にめざましい復興を遂げ、1961 年には戦勝国のイギリス、フランスをしのぎ、世界第 2 の経済大国となりました。ソ連が東欧から退き、ドイツ統一が目前となると、ドイツでは戦後ソ連によりポーランド領土とされ、850 万人のドイツ人が追い出されたオデル川、ナイセ川より東の地域 10.3 万 km<sup>2</sup> の旧領をこの機に回復すべきだ、との声も出ました。しかし、ドイツは東西統一の翌月 1990 年 11 月にポーランドと国境条約を締結し、プロシア発祥の地、まさに歴史的領土であり、統一ドイツの 29% もの面積を持つ、この地域を最終的に譲り渡しました。旧領回復にこだわれば、周辺諸国の警戒心を招くから合理的な策だと思われずし、ドイツ人は戦後の成功体験から、大事なものは領土ではない、とわかっていたのでしょう。

日本の成功は、ドイツ以上です。日本は、第 2 次世界大戦後、台湾、朝鮮、南樺太などを失い、領土面積は 54% 余に縮小しました。満州は名目上は別の国ですが、事実上は日本の支配下にあったからその 130 万 km<sup>2</sup> も含めれば、戦前の約 20% 余になりました。その日本も、鮮やかに復興して成長し、1968 年にはドイツを抜いて、戦前夢にも思わなかった世界第 2 の経済大国となったのです。ドイツや日本の経験は、現代の商工業、サービス主体の経済では領土でなく、経済体制や労働力の質と量、資本、技術、国外市場（すなわち友好関係）などが、国力を決める要素であることを示しています。

戦前、東洋経済新報の社長で硬骨の自由主義の論客だった石橋湛山は、日本の植民地経営が、台湾だけは何とか採算が合っても、朝鮮、樺太、満州は赤字であり「属領はすべて捨てるべし」との「小日本主義」を唱えまし



た。「満蒙は日本の生命線」と唱える軍が大陸に支配地を広げ、国民がそれに熱狂していた時代に、正反対の説を公然と唱えて逮捕もされず、日記によれば警視庁に招かれて経済の講演までしていたのは奇跡的と思えます。

彼は、戦後、第1次吉田内閣の蔵相、鳩山一郎内閣の通産相となり、1956年12月に自民党総裁・首相となりましたが、3か月で病気のため辞任しました。しかし、彼の説の正しさは、その後の日本の高度経済成長により証明されました。領土が20%になった日本は、赤字部門をすっぱり切り離すストラクチャアができ、急浮上したのです。

もし日本が第2次世界大戦に参戦せず、中立を保ち、戦後属領を抱えておれば、その後国内ではアイルランド独立派と同様に、朝鮮の民族主義者の爆弾テロが東京や京城（現ソウル）で続発、満州とソ連の国境には数十万の日本陸軍が展開し、太平洋ではアメリカ海軍との対決の形勢となり、経済は破綻したのでは、と考えれば、敗戦で属国を失ったのが実は「神風」だったのかと思えてきます。

帝国主義たけなわの19世紀半ばのイギリスにも、植民地経営はごく一部を除いて赤字であることを指摘する「小英国主義」の経済人、学者が現れ、植民地放棄と自由貿易を求めました。当時のイギリスは、最先進の工業国、最大の海運国、第一の金融国家で、その利益をインドなどの巨大で貧しい属領の警備費や港湾、鉄道、電信など、インフラストラクチャの建設、行政経費に吐き出していたのです。

その約100年前、イギリスの北アメリカ植民地も大赤字で、入植者を住民の抵抗から守る軍隊の維持費や広大な地域の行政経費に苦しんだイギリス政府は受益者負担を考えました。インドから北米に入る茶、カリブ海

諸島からの黒砂糖などの関税を上げ、密輸を取り締まり、取引書類や新聞、書籍にも印紙を貼らせましたから、入植者が反乱を起し、王政のフランスがワシントンらの革命派を支援して派兵し、イギリスは1793年に独立を認めざるを得なくなりました。

この時イギリスが失った「独立13州」は、230万km<sup>2</sup>、今のイギリスの9.5倍の面積に当たります。それを失ってもイギリスは衰退どころか赤字を解消して発展、フランス革命政府やナポレオンとの戦いに勝ち、19世紀末には地球上の陸地の4分の1を支配するに至りました。

イギリスは、12世紀のアイルランド征服以来、植民地経営の経験が長く、地元民の反乱に悩まされただけに老練な判断をし、第2次世界大戦で勝ったものの経済力は衰弱、海外属領の保持は困難と見て、商業拠点の香港などを除き、大部分の植民地を放棄してトラブルを回避し、友好関係を保ち得たのはさすがだったと思います。マレーでは藩王に権限を譲りましたから、それに対するゲリラ活動が起きましたが、ゲリラ対策の原則である「妥当な政策と最小限の武力行使」を守り、鎮圧に成功しました。

アルゼンチンから1833年に奪ったフォークランド諸島も返還しようと交渉を始めましたが、イギリス人島民1,800人が反対し頓挫しました。1982年、激しいインフレに悩んだアルゼンチン軍人政権のガルチェリ大統領は人気回復を狙って同島を奇襲占領しましたが、イギリスは直ちに艦隊を出し奪回に成功し、大国の威信を保ちました。しかし、その後イギリスは牧羊しか産業のないこの島を守るため陸軍450人、空軍750人、戦闘機4機、輸送機2機、ヘリコプター3機、フリゲート艦1隻を常駐させざるを得ず、財政難に拍車をかけました。これに懲りたイギリスは、かつて英海軍が発見するたび、やたらに英国領にしていた無益の島々を付近の国に譲渡して回り、管理責任を免れる巧妙な策を取りました。「寸土も譲らず」の正反対です。

フランスは第2次世界大戦でドイツに降伏、ベトナムなど仏領インドシナに日本の進駐を認めざるを得なかったのですが、イギリスに脱出したドゴール少将が「自由フランス政府」を樹立、米英軍に協力したため、名目上の戦勝国になりました。フランスは戦後、イギリスとは逆に軍を送って植民地回復を目指しましたが、地元ベトナム軍は意外に強く、フランス軍1万5,000人がディ

エンビエンフーの基地で5か月包囲の後突入され、生存者1万人が降伏、1954年ベトナムは独立しました。これを見たアルジェリアのアラブ人も独立運動を起し、激しいゲリラ戦になりました。フランス軍は最大時50万人の兵力を送って制圧にほぼ成功したかに見えましたが、歳出の4割近くが戦費となり、フランスの財政は破綻状態となる中、ドゴールが再登場し、分離、独立を阻止しようとする入植者や現地軍の反抗、クーデター計画、続発したドゴール暗殺未遂事件に屈せず、アラブ人側と秘密交渉を進め、1962年にアルジェリアを独立させました。ドゴールは再び救国の英雄となりましたが、本国の4.3倍もの領土の分離に成功した英雄、とは皮肉です。

ロシアも旧ソ連が1991年12月に崩壊し、14か国が分離独立したため領土面積は76%、人口は49%に縮小しましたが、GDPは、ドル換算で1990年と2010年で2.64倍に拡大しました。市場経済にし、グローバル経済に参加したこと、東欧支配の終了や西側との対立解消による軍事費の削減、属領での行政・治安経費の負担解消が主な理由だと考えられます。ロシアは中国と1962年以来国境紛争を続けていましたが、1991年に国境協定を結んで国境画定を始めました。現地では当然細部について紛議がありましたが、協定成立以来17年たった2008年10月、ついに完全解決、記念碑序幕式が行われました。

中国は、1972年に激戦を交えたベトナムとも1993年に国境画定協定を始め、1999年に両国外相が国境協定に調印しましたが、289もの係争地点があり、標柱を立てる作業は難航しました。しかし、2009年2月にやっと終了、最終確定式となりました。中露国境、中越国境の国境貿易は盛況で、譲り合いと妥協は双方を益しました。日本と同様、中国でも「愛国者」は「寸土も譲らず」と迷信じみたスローガンを叫びますが、実際には中国政府も相手側も少しずつ譲ったからこそ国境画定ができたのです。

南シナ海に点在する約400の小島、岩礁からなる南沙諸島では中国、ベトナム、フィリピン、マレーシア、ブルネイが領有権を主張し、武力紛争も起きましたが、南沙諸島で最大の長島（現・太平島）は1923年から日本のラサ鉱業がリン鉱石を採掘、第2次世界大戦前の1939年3月に日本政府は「新南群島」と名づけて台湾南部の高雄市の一部としました。1952年に当時日本が中国の正統政府としていた中華民国（台湾）との日華平和条約第2条で、台湾、澎湖島などと並び新南群島の全ての権利を中華民国に対し放棄しました。台湾海兵隊は当時から太平島に駐屯しています。

日本は、1972年の日中共同声明で中華人民共和国を

中国の唯一の合法政府、と認めましたから、国家の承継により、南沙群島は中国領である、というのが外務省の見解です。中国が日華平和条約を持ち出せば領有権論争で決定的論拠となると思われますが、中国政府は蒋介石の中華民国政府を認めず「偽政府」としてきましたから、それが他国と結んだ条約は引用しづらいのです。日本としても捨てた領土の件で「あれは中国に渡した」と言っただけでベトナム、フィリピンなどに恨まれてはばからしいから、黙っているのが得策と思われます。

さて、焦点の尖閣諸島に関しては、国際司法裁判所に提訴すれば、できる限り客観的に考えても、日本に有利な証拠は多いのです。もし中国が応訴しないと、中国の民衆、特に知識層には「こちらの主張の根拠は弱いのか」とわかり、いくらか沈静するのではないかと思います。

しかし、政府は「領土問題はない」と言っていますから訴訟もできません。自分で手を縛った形です。日本では「毅然とした態度」が流行語ですが、それで相手が折れてくれると思うのは、平和ボケの極みで、こちらが毅然なら、相手も毅然となるのが定石です。テリトリー争いは、動物の本能だけに敵対感情が双方で高まり、メディアは人気を得るためにそれに迎合し、煽りがちで、結局は戦争になりかねず、いま日本は、戦争か和解かの岐路に立っています。アメリカは「財政再建、輸出倍増」を当面の国家目標としていますから、アメリカ経済に決定的に重要な中国との対立に引き込まれるのを警戒し、日中双方に冷静な対応と関係改善を求めています。

日本経済界も最大の輸出市場である中国との関係修復を望んでいます。安倍総理は、前回2006年9月に就任した際、その12日後に訪中し、「戦略的互惠関係」の共同声明を出して日中関係を劇的に好転させた実績を誇りとし、その再現を願っているようです。しかし、戦争やその勝敗を考えず、経済の利害も計算しない単純なメディアの強硬論は、大衆の耳には「わかりやすく」心地よいだけに強力で、個人的には「困ったものだ」という理性的な政治家、官僚も「弱腰」の非難を恐れがちです。

この重大な時期に当たり、各国、各地域社会で相当の影響力を持たれつつ、政治からは比較的自由である人々の世界的連合体であるロータリークラブの方々が「国境なき平和」の旗印を掲げられ、論じられるだけでも理性派を勇気付け、感情と理性が両側に乗る天秤を理性の側に傾ける役に立つかもしれません。また、この際だからこそ、ロータリーが支援する中国人留学生を会合に招かれて、厚遇されるのも内外へのメッセージになるかと考えます。できることはさほど多くないとしても、ロータリアンの方々が、その究極の目標である平和に向けて奉仕されることの意義は、これまでになく大きいのではないかと考えます。

## 「奉仕を通じて平和を・今、ロータリアンにできること」

---

パネリスト 田岡 俊次 (ジャーナリスト)  
平塚 広義 (ロータリー平和フェロー)  
青木 忠茂 (船橋RC)  
平野 信夫 (船橋南RC)

コーディネーター 二神 典子 (ロータリーの友編集長)

---

二神：田岡さん、ただ今は、ご講演をいただきありがとうございました。田岡さんと、ロータリー平和フェローの平塚さんには、『ロータリーの友』から国際ロータリー(RI)会長の田中作次さんと平和に関する記事をお渡ししました。冒頭に田岡さんからお話がありましたように、これらの資料に非常に興味を持ってくださいまして、それが今、お話ししていただいた内容につながったのだと思います。

皆さまご存じのように、今年度、国際ロータリー(RI)会長の田中作次さんが「奉仕を通じて平和を」というRIテーマをお示しになられ、私たちロータリアンはそのテーマに向かっていろいろな活動をしています。田中さんは、そのテーマを発表された時に、同時にこんな話もされています。

「平和というのが何を意味しているのかということについては、一人ひとり違います。どの人の定義があっているのか、間違っているのか、ということではなく、自分にとって平和が意味すること、それがまさに平和なのです」

昨年の『ロータリーの友』2月号に『The Rotarian』でインタビューした記事を書きました。その中に、「平和とは非常に抽象的で定義しにくい言葉だと思います。その定義は、住んでいる地域や社会によって異なると思います。ある地域では飲み水を得ることが平和をもたらしてくれます。読み書きができることが平和につながります。家族が安全であるだけで平和だと感じることもできるでしょう。平和という概念には満足感、心の安らぎ、幸福感が含まれていると思います。このように平和は一人ひとりの感覚に頼ることが大きいのです」という言葉がありました。

先ほどの田岡さんのお話で言いますと「戦争」の対義

語として「平和」をとらえるのも平和の一つの定義だと思います。田中さんは「それも含めてもう少し広くそれぞれの定義をお考えください」とメッセージを送ってくださっています。

それを受けてこの一年間、平和について考え続けていらしゃったであろうロータリアン二人からそれぞれの思う平和の定義についてを伺うことからこのパネルディスカッションを始めさせていただきたいと思います。青木さんよろしくお祈りします。

青木：私は、地区で2006年からロータリー平和フェローを担当しております。その関係で今日パネリストに選ばれたのだと思います。以前は、「平和って何なんだろう」とあまり深く考えたことはありませんでした。平和な中で過ごしておりましたので、ロータリー平和フェローを担当することになり戸惑ったのですが、平塚さん(第7期のフェロー)とおつきあいする中で、私の平和の概念が変わって参りました。まず、ロータリーの皆さんがやっている奉仕すべてが「平和」である、ロータリーで言う平和とはそれだけ広いものと感じるようになりました。

戦争がないだけが平和ではない。まず平和の基になるのは「思いやる心」です。ロータリーの精神というのは、みんな思いやりですよ。個人個人の職業奉仕が思いやりであって、それがクラブの奉仕の中での「思いやる心」になり、社会に対して奉仕をしていく。これも思いやりです。そして、国際奉仕、新世代奉仕と広がっていきます。思いやりが奉仕。ですからすべてロータリーの奉仕は平和につながるわけです。平和を考えていくというよりも、ロータリアンは奉仕という実践をしているのです。

ただ、ここで田中作次会長が平和ということを見つめ直しましょうと提案されました。ロータリアンは今までもやっているのですが、ロータリーにいてことで免罪符を買っている感覚になってしまっている。もう一度、平和とは何かと見直すきっかけを与えられたのだと思います。

平野：平和とは戦争の対句としての平和もありますが、自分としては「心の穏やかな・平安な状態」が重要なかと思っています。家族が幸せに過ごせている状態を、個人的なイメージで言う平和と認識をしています。平和というのは、一人だけで平和であるということではなくて、



常に他者、社会との関係性の中で平和があるのではないか。そこに、ロータリアンの出番があると思います。

**二神：**今、青木さんからロータリー平和フェローのお話が出ました。ロータリー平和センター・プログラムとかロータリー平和フェローについて、「よく知っている」という方は挙手いただけますか？ では、名前くらいは知っているという方、挙手いただけますか？ ロータリー平和フェローという名前を聞いたことのある方？ え、こんなに少ないんですか。ロータリー平和センター・プログラム？ 『ロータリーの友』によく載せているのですが……。いかに読んでいただいているかということで、ちょっとさみしくなってきました。では、平和フェローの平塚さん、そのことについて簡単にご説明いただけますか。

**平塚：**私は第7期のロータリー平和フェローです。国際基督教大学（ICU）で2年間、学ばせていただきました。生まれは千葉県です。ロータリー平和フェローシップとは、何ですか？ という質問が出ましたので、そこから答えさせていただきますと、世界でロータリー財団と国際ロータリーとが連携して、いくつかの大学が修士課程を提供する、または短期の職業訓練を施す、平和と紛争解決の最先端の技術を施す取り組みが2001年から始まっております。私は7期です。

もともとフェローシップの取り決めの一つに自分の国籍と同じ大学に行ってはいけないということがあります。しかし、私は2008年までアメリカで大学に通い、その後仕事をしていました関係で、大学以上の学位を国内で受けていない場合はよいという特別条項がICUにありましたから、それを利用してサウスカロライナ州の第7770地区からの推薦でICUに行くことになりました。高度職業人生の一貫ですから、紛争解決の最前線で活躍できる人間を目指す人々を毎年世界中から60人

選んで、世界選抜ですから非常に競争の高いフェローシップであります。現在は大学職員として国際学生の受け入れと、彼らの日本文化への順応を支援する教育・研修を行っております。

**二神：**平塚さんに続いてお聞きしたいのですが、2年間ICUで国際紛争とか平和に関して勉強されたかと思いますが、その中でご自身がお考えになられている平和について少し簡単にお聞かせいただけますでしょうか。

**平塚：**平和という言葉自体、非常にとっつきにくいものです。紛争解決と言うともう少しできると思うのですが。僕の同僚は、例えば、今、国連の最前線で人道支援をやっている人間だとか、国際協力機構で開発一般をやっている人間だとか、弁護士で紛争メディエーションをやっている人間だとか、多彩な人材が世界中から集まってくる訳です。大学で教育に携わる人間として、文化がどのように人の構造に影響を与えるか、また文化の違いを超えて2年間勉強研究できるのかということをやっと考えておりました。まだ答えは出ていないのですが、その中で得られたものはロータリー平和フェローも喧嘩はするという事です。平和を勉強しているのになんで喧嘩するのかというと、やはりものの考え方が根本的などころで違い、文化も違うので、行動の取り方が違うのです。そこをいかに対人のレベルで理解して合意して問題解決するかが、教育に携わる人間としては非常に重い課題かなと思います。

**二神：**田岡さんから最後にご提案がありました「国境なき平和」ということは、ロータリアンが常に考えておいてほしいということです。平塚さんが言われた対人レベルでの問題解決、これも共通項のあるお話ではないかと思います。私が所属する第2750地区は、東京が中心ですが、グアム、サイパン、パラオ、ミクロネシア連邦も含めて一つの地区を構成しています。これらの国や地



二神典子氏



田岡俊次氏



平塚広義氏

域に加え、外国から会長代理を迎えますと、その方の国も含め、地区大会では、国歌斉唱だけでとても時間がかります。

日本の方には実感はないと思いますが、ロータリーの地区の分け方には、それほど国境を意識していないところもたくさんあります。アフリカでは何か国かが一緒になって地区を構成し、何か国語も話されているところがあると聞きました。そういう中で活動されているロータリアンとして、国境を超えて人と人というキーワードで平和を考えた場合に、何ができるのかということについて、ご意見がございましたらお話しください。

青木：先程ほど、二神編集長からどれだけの人がロータリー平和フェロシップをご存じですか、ということをお聞きした時に大変寂しい思いをしました。当地区は、平和推進パイオニア地区と言いまして、このロータリー平和センター・プログラムの中でも大変誇りある地区なのです。現在この中にもカウンセラー経験者が1人、また、現在カウンセラーをされている方が2人おります。船橋RC、船橋南RCはスポンサークラブになっております。市川東RCクラブがホストクラブになっております。そういう中でロータリー平和センター・プログラムを理解していただく。平塚さんはアメリカの地区から来ています。当地区にもロータリー平和フェローが誕生しています。当地区は、宇野かおりさんのスポンサーになっております。ロータリー平和フェローとの交流を積極的にやっていただければ、そういうことが可能になるのではないかと思います。

二神：国際大会へ行かれた方はお分かりになると思いますが、会場の中を歩いていると、ロータリーの国際性を目の当たりにすることができます。友愛の家ではいろいろな人たちから声をかけられます。英語もままならないのに、フランス語、韓国語、スペイン語と、いろいろな言語で声をかけられて戸惑うこともあるのですが、いろいろな国の人たちと話ができるのは楽しいことです。ガバナー補佐の浜名さんは、いつも友愛の家の切手

ブースにいらっしゃいますが、いかがでしょうか。

浜名：国際大会へ12年ほど続けて参加させていただいております。そういう機会があったのは、ロータリー切手の会に入ったということもあるのですが、国際RYLAに参加したのが最初です。友愛の家におりますと、何年かに一回は開会式に出られなくて、ブースで番をしていることがあります。この時にいろいろな方が見られます。中国の上海RCの最初の会長が見えられてお話をしたこともあります。その時に、中国の人はまだロータリアンになっていないが、一生懸命やっているというお話を聞いたり、ウクライナで切手を集めているロータリアンがやってきてお話ししたり、ノルウェーでロータリー地域雑誌を出している編集長がみえたり、片言ですがいろいろな話ができたとという経験があります。

二神：近くに安川さんがいらっしゃいますが、安川さんともよく切手のブースでお会いします。いかがでしょうか？

安川：私はあまり英語も強くないので、ボディランゲージと片言の英語で話しています。ブラジルの日系2世の方は、日本語を読み書きはできなくとも、話すことができる方がいらっしゃいます。前はオーストラリアと地区とローターアクトの交換をやっていましたので、その時にホームステイした方と国際大会でお会いできたりしました。普段お会いできない方といろいろお話しできることが良いところです。

二神：今の話は、直接的に今日の平和とはというテーマに結びつくかという、そうではない部分もありますが、ロータリアンはこのような経験を通して、国境を超えることはできるのかなと思います。平野さんから事前にいただいたメモの中に宗教の限界、政治の限界があると書かれていましたが、その限界を埋めるものとしてロータリーがあるのか、あるとすればいったいどのようなものでしょうか。

平野：国家は国民の平和を守る存在です。自国民に向かっていく存在です。ということは、逆に国民の平和を



青木忠茂氏



平野信夫氏

守るために、他国との紛争を引き起こすことがあります。宗教は、神、教祖、教典を信じることで平和を得ようとしますが、そうすると排他的になり他の宗教との軋轢を生み、宗教戦争も実際に起きています。確かに国家も宗教も平和を求めための薬ではありますが、万能薬ではありません。ロータリーは別の効能を持った薬であるのかなと思います。ポール・ハリスさんの追求していた寛容性を追求していくことが、平和に繋がるのではないかと思います。

**二神：**戦争というと、国と国の対立になるかと思いますが、国内の紛争も増えてきていると思います。国の中の利害の対立も増えてきていると思いますが、その辺り田岡さんいかがでしょうか。

**田岡：**国内の紛争は、昔からあります。国内の紛争も、国外の戦争もどちらも悲惨です。「平和はなんであるか」という議論ですが、日本が本当に平和なんだと痛切に感じます。本当に戦争になって子どもが死んでいく、食べ物がないという状態になっていくと、平和はなんであるかという疑問も抱かない。つまり、こういう状態が早く終わってくれないかということだけです。第2次大戦直後の日本で平和とはなんですか？ と聞いたならば、「空襲警報が鳴らないこと」「灯火管制がなく夜も電灯がつけられること」と答えるでしょう。やっぱりそういう議論になるのは、今の日本が平和に満ちている、99%平和だからでしょう。残り1%程度がいじめ問題などになっていくのかと思います。

私が平和を実感するのは戦場から日本に帰った時です。爆撃があったり、ミサイルが飛んできたり……。帰国する途中、乗換えのヒースロー空港でバーに入ってシェリーを飲んだ時にホッとしました。平和とはこういうものだなあと思ったことがあります。戦争がない状態が平和であることは疑いもない。それにプラスちょっと残っている部分として、国内問題があります。戦争になってしまえば、家族の仲の良い平和などは吹っ飛んでしまい、どんどん人は死んでいくし、父親が兵隊にとられる

というような状態になっていくわけですから、家族の平和などというのはマイナーな話だと私は思っています。

**二神：**会場を見渡しますと、多分、戦争に行った経験がない世代が主流になっていると思います。田岡さんのように取材に行かれるとか、特別な場合にしか私たち日本人は戦争の経験はないと思います。しかも、それであっても当事者という立場の経験とは違います。当事者だともっと

切実なものがある、今のお話を伺いますと、平和であってほしいと思うところまでもたどり着かないというのでしょうか。

「平和とは何ですか？」ということをお聞きしたのは1年前から私たちに問いかけておられます。これを受けて、『ロータリーの友』で「あなたが考える平和とは何ですか？」という問いを投げかけ掲載しました。お読みいただいたと思いますが、この中で田岡さんのメッセージに応じて自分なりに平和とは何か考えた方はいらっしゃいますか？ 山中パストガバナーお話ししていただけますか？

**山中：**私は、終戦の時に小学校4年生10歳でした。東京帝国大学の赤門を歩いて行った反対側に本郷区立誠之小学校があり、そこに通っていました。幼稚園は無事卒業しましたが、疎開してその小学校は卒業することができませんでした。平和とは、ロータリーの中である意味では封印されてきた言葉です。ロータリーの綱領の最後に出てくるのが、平和です。「国際間の理解と親善と平和を推進すること」とあります。そういうことを考えて戦争中のことを考えますと、あまり変わらないと思います。

親父に戦争のことを聞いてもただ黙ってしまう。常に後ろに銃剣を持った人がいる。国中が一つの方向に向かえという時に国民の命を大切にするのか？ 相手も自分たちも大勢が死んでそれで国家が成り立つのか？ 平和を求めて戦争をしているのか？ 答えは簡単です。やってはいけない戦争をやったのです。それがあから親は黙る、兄はソッポを向くということです。鹿児島から今日これから死に行く若者を声を限りに叫びながら見送ったおばさんたちを見たことがあります。おばさんは、必死になって叫んでいる。それに反対すると後ろに誰かいるというような時代が二度と来てはいないと思います。ロータリーにも私自身にも残しておきたいと思うものは、私が地区のガバナーをやった1999 - 2000年度の地区の目標の中の「生命の保全」です。ロータリーは、

平和を求めるが決して平和活動をやってはいけない。政治に介入してはいけない。僕が厚生大臣だったら国境なき医師団は素晴らしいなどはと思いますが、許可しません。生命の危険があるからです。

**二神**：それでは平塚さんにお伺いしたいのですが、ご自分の専門分野もそうですし、それからICUではいろいろな方たちがいろいろな研究をされていたと思います。また、そういう方たちと意見交換もされてきたと思いますが、その中で今の世界情勢をお話いただけますか？ 田岡さんからいろいろお話を伺いましたが、別な観点から少しお話していただけますか？

**平塚**：僕の実体験で、僕が常に面している課題についてお話したいと思います。教育に携わる者ですから、学生と面と向かなければならわけですが、過去に旧ユーゴスラビアから来ている学生がいました。一人はイスラムのホシネの方から、もう一人はセルビアの方から来ていました。この二人は仲が悪いのです。政治的な背景、宗教的な理由で仲が悪いのは薄々わかります。教員として、一人の教育者として自分のクラスにいるわけですから、それを無視することはできません。実際の問題に直面した時に、僕はどうか？ 皆さんはどうか？ ほかの案件で、ルワンダから学生が来て一人はツッチィ、もう一人はフッズの方で、授業中険悪なんです。ある意味、それは紛争な訳です。それをどうやって解決するかが、僕にとっての紛争解決です。

僕はもちろん戦争に行ったことはないですし、人を殺めたこともないですし、また命に関わるような経験もありません。そういう意味では平和な人生を歩んできたと思うのですが、平和と紛争解決の最も重要な議論は、暴力をどうやって減らすかということです。授業の中でも実際の生活の中でもそうですし、究極には実際に戦争が起こりうる可能性の時にどうか？ 暴力をもって決めるのか？ または、それを回避するのか？ それは焦点の違いだけであって根本的な課題は一緒です。例えば旧ユーゴスラビアから来ている二人が殴り合いの喧嘩になった場合、僕は教員ですからそこで止めないといけないわけです。暴力を止めるにはどうしたらよいのかというのは、紛争を解決するという観点から大事なことだと思います。そこであえて田岡さんにお聞きしたいことがあるのが、これまで2000年以降は、国家間の戦争は統計的に減り、国内の紛争は増えているのですが、田岡さんからのポジションからそういうものの解決または課題をどうやって対処しますか？

**田岡**：冷戦終了後、地方地域紛争が増えたとよく言いますが、よく知っている者から見れば実はそうではありません。各国の中で紛争が起きると、片方にアメリカが肩入れする、もう片方にソ連が肩入れするといったわけ

で、冷戦時代は両方が武器や弾薬を送り込んでもっとひどかったのです。むしろ冷戦が終わったために援助をすることがなくなったから、収まった国内紛争の方が実は多い。しかし、どうして冷戦後、国内紛争が多くなったと思うかという、かつては米ソが睨み合っていたところは何千万、何億単位の死者が出る計算で、核を使えば全世界の人類を何回殺せるかという状況でしたから、その頃は小さい戦争、紛争は注目されませんでした。冷戦が終わってからは注目が集まって紛争が増えたように見えるだけです。

**平塚**：僕の質問は、数が増えた減ったではなくそういう宗教、民俗、文化の境界線が問題化する紛争をどのように解決するかであり、国家間の紛争が善悪ではないのです。

**田岡**：一つは、アフリカなどは、もともと国境の引き方に無理があります。ベルギーが占領した所がベルギー領となり国境になりました。本来、全く関係なしに国境を引いていったわけですから当然国内で紛争が起きます。紛争をなくそうとすれば、民族別に調整すればよいのですが、調整しようとする、またそこで紛争が起きるので困ったものです。不自然なことをすると良くないのは、イスラエルの建国の例があります。1947年第2次大戦後、国連が元凶になって戦争が起きているような話です。国連がユダヤ人の建国を認めました。当時ユダヤ人の人口が65万、アラブ人の人口は120万、1:2だったわけです。ところが、土地の方は55%がユダヤ人のものになり、残り45%がアラブ人ということで収まるわけがありません。そのために第4次中東戦争も起きたし、イスラエルによるアラブ人の圧迫あり、それを支援するアメリカに対するテロ活動もひどいわけで、とにかく不自然なことをよその国がやらないようにすることが大事です。

**二神**：お話を伺って、すごく難しい話だと感じました。先程の田岡さんの話で言うと、今、ボーダーレス化をしているという話がありました。経済は、どこの国ということではなく国境を超えて、企業が多国籍、無国籍ということで今進んでいます。一方、国内で紛争のあるということに関して、例えばアフリカなどは先進国の利害関係だけで無理やり国境線を引いてしまったということは、皆さんご存じだと思います。それを解決するためには民族や歴史的背景などに合わせた国境線を引かなければならないということですが、それはそれで非常に矛盾をはらんでいて、どっちがどうなんだろうという頭が混乱する話です。ここが平和を考える時の難しさであり、国境を超えてボーダーレス化している先進国といまだに国境を超えた経済活動をできない国との格差といった問題もあるのでしょうか？

田岡：企業活動というものは、完全にボーダーレスになってしまっています。国境を無視してテロリスト、アラブ人同士の連帯感もボーダーレスです。そういう点では戦争もボーダーレス化しています。戦争がボーダーレス化とは変な話です。本来軍隊とはボーダーしか守れません。知的所有権とか貸した金とかそんなものは守れるわけがないので、そういう点ではボーダーレス化は、実は相当戦争のチャンスを減らしているという積極的側面があります。しかし、テロリストのボーダーレス化は困ったことです。

二神：そう意味で言いますと、ロータリアンのできることは、先ほどの話の中にもございましたが、かなり制限されています。それでもやらなければならないというか、やった方がいい。そこで、今、ある話を突然思い出しました。李東建さんがRI会長エレクトだった国際協議会の閉会の辞で話されたものです。ヒトデがたくさんに浜に打ち上げられている。そのままにしているとヒトデは死んでしまう。一人の女の子がヒトデを海に投げ返している。ある大人が、そんなことをしても無駄ではないかと話しても、女の子は黙々とヒトデを海に返してあげている。こんな話でしたが、私たちが平和のためにできることは、この女の子のようにたとえ些細なことでも、自分のできる範囲のことをする。そうすることによって全世界のロータリアン120万人分の何かができるのではないかと。それでもやはり、限られたことだと感じますが、ロータリアンの立場として、青木さん、平野さん具体的に活動している事例なども入れながら、こんなことも役に立つのかなという事例があればお話しいただきたいと思うのですが。

青木：ただ今のお二人の議論は私たちロータリアンにとって現実的ではない。政治家が外交のために努力するという、国際政治のレベルのものです。われわれロータリアンが何をどうやって平和を求めていけるかといえば、ロータリー自体がボーダーレスだということだと思っています。その中で紛争解決していくのは、一つはある意味では宗教だと思っています。宗教心がない、宗教心が間違った方向に進めば紛争になります。ロータリーの精神に基づいて国際的な奉仕活動をしていけば、平和につながります。一つの例が「ポリオ」。ポリオをなくすために、われわれは頑張ってきました。ビル・アンド・メリнда・ゲイツ財団と一緒に活動してきました。昨年、ポリオ撲滅のための2億ドルのチャレンジという募金活動は終結しましたが、ポリオはまだ残っています。そういうところをロータリーではもう少し深く理解して、ポリオ撲滅や他の問題点を追求して、ロータリアンとして、クラブとして、地区として、RIとして、進めていくことがロータリアンの立場からできるこ

とだと思っています。

二神：ポリオ撲滅はあと少しのところまで来ていますが、まだまだ活動をしなければいけません。ポリオ撲滅に関して『ファイナルインチ（最後の1インチ）』という短い映画が数年前にできましてご覧になられた方もいらっしゃると思いますが、今ポリオ撲滅の関連で、その映画を青木さんが高校生たちにお見せになったのですよね。ポリオの活動を知らない子どもたちがその映画を見て、非常に心に深く刻まれたようです。その話をさせていただけますでしょうか？

青木：私、写真屋をやっておりまして、学校の写真も撮っておりますし、スタジオで写真も撮っております。そういう面で、私立の高等学校に『ファイナルインチ』を持って行ったところ、これを教材に使いたいという申し出がありました。それに合わせて、ポリオやロータリーの奉仕活動についても話をしてほしいと依頼を受けました。20人くらいのクラスで上映しました。『ファイナルインチ』は、インドでポリオワクチンを投与していく活動を記録したビデオです。

これを見てもらって、生徒たちに「平和とはどうことか？」ということに結びつけたかったのです。それで生徒たちに平和ってどうやって考えますかと聞かれました。生徒もわれわれと同じで、戦争がない社会が平和という概念でした。生徒たちは、平和になるためには実際に何をしたらよいか感じてはいませんでした。そこで、平和とは思いやりであって、まず皆が平等で同じスタートラインにつけることが平和であるのだから、クラスの中でもいじめられている子がいて、皆と一緒に努力できるラインに立てないような状態は平和ではない。それすることから、平和が始まると言いました。後で、学校が感想文を送ってくれました。思いやりが平和になって、自分を犠牲にして人を幸せにするのではなく、人を幸せにするには自分も幸せでなくてはいけない。そういう気持ちで、平和に結びつけると理解してくれた回答がきました。

二神：平野さんのお考えをご紹介しますでしょうか？

平野：先輩のロータリアンたちが、かつていろいろな紛争、戦争の際に調停役を務め和平に貢献した活躍があったわけです。ちょうど、今月の『ロータリーの友』に「ロータリーの平和推進活動の流れ」というとてもわかりやすい年表が掲載されていました。本日のプログラムの後ろに転載させていただきましたので、ご覧ください。ここには、先輩ロータリアンが平和に貢献してきた活動が簡潔に書かれています。ロンドンで開かれた平和計画会議が後のユネスコに発展し、国連憲章の起草にロータリアンが協力したり、世界平和のために大きな貢

献してきました。今月の『ロータリーの友』に掲載された「平和を求める声」はとても素晴らしい記事でした。

今日のテーマの「今、ロータリアンにできること」ということで、ここにいらっしゃる先輩ロータリアンたちをお願いしたいことがあります。今の世界の指導者たちは、オバマさんは51歳、習近平さんは59歳才と、戦争の経験がない世代が多くなってきています。しかし、実際に戦争を体験されたロータリアンがまだいらっしゃると思っています。われわれは、戦争を体験されたロータリアンの話を卓話などでぜひ聞いてみたいと思っています。日本のロータリークラブもかつてRIから脱会したこともあります。そういった歴史の継承という意味も含めて、次へ受け継ぐ機会を持ちたいと思っています。

**二神：**最後にまとめとして、田岡さん手短にお願ひします。

**田岡：**日本は、戦争か平和かという瀬戸際にきているかと思っています。中国と和解をいう人が少数になってしまっている。ヤレヤレの方が多くなってしまいました。このままでは平和など議論している場合ではなくて戦になったらどうなるかまじめに考えるような状態なのです。そういう時にこそ、ロータリークラブにできることは、「国境」より「平和」なのだ「友好」なのだとはっきり言うことです。政治の世界でも、中国と和解を望む人もいれば、調子に乗ってやっつけろという人もいます。天秤に乗ったような情勢ですから、ちょっとでも「平和」「友好」に傾くと、状況が大きく変わります。ですからロータリアンの声はかなりの影響力を持つと思っています。すごく好戦的な評論家が日本を煽り立てたりしていますが、そういう人たちにはできるだけ手を貸さず、ロータリーの本来の理念を貫いてほしいと思っています。

**二神：**私の個人的な話で恐縮ですが、大学時代に国際関係、国際法の勉強をしました。そこで学んだことは限られたことではありましたが、その後『ロータリーの友』で編集の仕事を始め、特に『The Rotarian』の記事を読んだりしてロータリーの活動を知るにつれて少し自分自身が変わったことがあります。平塚さんの世代とは国際関係等の勉強の内容が変わってきていると思いますが、私たちの世代が勉強した国際情勢は、国と国の関係そのものでした。平和にしても戦争にしても、国同士の利害関係、思惑といったものから考えるというような授業でした。

しかし、ロータリアンというのは、例えば戦争や紛争が起こったら、自分たちが住んでいる所を追われ難民になった人たちの支援をするといった活動をしています。難民キャンプの人たちの衛生、食料、衣類などの支援をしています。現地に出かけて行って支援するロータリアンの記事をたくさん読みました。かつては、テレビ、新

聞などで戦争の記事を見た時に、その政府やリーダーといった戦争をやっている当事者たちがどういう立場や考え方なのか、どういう理由で戦争が起こったのか、今どういう状況なのか、ただそれを知りたいと思うだけでした。しかし、この仕事を始めてから、戦争や紛争のニュースを見ると、そこで暮らしている人々がどうしているのだろうかと思うようになりました。親を亡くしたお子さんもいらっしゃる、子どもを亡くしたお母さんお父さんもいらっしゃる、銃弾が飛び交う中で恐怖に怯える人たちがいるということを、思うことができるようになりました。

平野さんからお話が出ていましたが、私も戦争を知らない世代です。戦争を知らないロータリアンは非常に多くなっています。田岡さんのお話にもありましたが、戦争を知らないということは、本当に幸せなことだと私は思います。しかし、戦争に対して実感が無いということは、戦争に対して非常に安易に考えてしまう危険性があるのではないかとも思います。あの国の人は気に入らないからやっつけてしまおうと、ちょっとしたことで騒ぎ立て、それが戦争や紛争につながってしまうかもしれません。これが子ども同士の喧嘩でしたら、タンコブ一個か二個ですみますが、国と国との喧嘩はどちらが正義かに関わらず、非常に多くの人を恐怖にさらし、多くの人を命を奪い、多くの人を不幸にすると考えます。

まずは、ロータリアン同士が、ロータリーの活動を通して、国境を超えどこの国、どこの民族という意識を超えて付き合いができるようになること、これが大事だと思います。先ほど国際大会へ行かれましたかとお尋ねしたのは、私自身、そこでいろいろな人たちと話をするうちに、自然と相手がどこの国の人か忘れてしまうという経験ができたからです。

それだけではなく、ロータリアンが難民キャンプなどに入って活動をしている記事を読んで、戦争というのはニュース映像で見るとようなテレビゲームのような画像ではないことを知ること。戦争を知らない世代でも、普通の方々より、戦争を身近に感じるができるのが私たちロータリアンだと思います。青木さんは、高校生にポリオの活動を知ってもらうことを通して平和を考えてもらおうという活動をされていますが、インターアクター、ローターアクターをはじめ、身近にいる地域の若い方たちに伝えて、若い方たちが戦争の悲惨さを自分のこととして捉えるようになっていただけるように努めていくことが、ささやかですが、私たちができることだろうと、皆さまお話を伺いながら思いました。

結論の出ない話ではありますが、これをもって今日のまとめとさせていただきます。今日は、どうもありがとうございました。



森嶋康長次期ガバナー補佐挨拶



鈴木正直前ガバナー補佐に感謝状



懇親会

## ロータリーの 平和推進運動の流れ

### 1911年

北アメリカ以外で、最初のロータリークラブ  
がアイルランドで創立  
(ダブリンRC、ベルファストRC)

### 1914年

ヒューストン大会で国際平和会議を招集する  
という決議が採択される

### 1917年

アーチ C. クランフ会長が、現ロータリー財  
団の基となる「世界でよいことをするため」  
の基金を創設しようという提案をする

### 1922年

ロサンゼルス大会で「ロータリーの綱領」に  
平和に関する項を加えることが採択される

### 1923年

セントルイス大会で、アメリカ大統領で、ロ  
ータリアンのハーディング氏が、「あらゆる  
地域社会にロータリーができれば、世界の平  
穏と前進は保証されるでしょう」と語る

### 1932年

ボリビア・パラグアイ間で戦争が始まり、  
ロータリアンは捕虜の救援活動に尽力する

### 1939年

『The Rotarian』はガンジー、  
ジョージ・バーナード・ショーなどが  
世界平和の大切さを説く記事を 160 本掲載

### 1940年

ハバナ大会で、「人権の尊厳が存在しない所  
に、ロータリーは存在することも、その理想  
を普及することもない」という決議を採択

### 1942年

ロンドンで開かれたロータリーの  
平和計画会議は、UNESCOに発展する

### 1945年

国連憲章の起草にロータリアンが協力する

### 1965年

ロータリー財団が、マッチング・グラントと  
GSEを開始する

### 1980年

アルゼンチンとチリ間で緊張が高まると  
ジェームス L. ボーマー Jr. RI 会長は  
モンテビデオで会長主催親善会議を開催し、  
両国のロータリアンを召集する

### 1981年

「ロータリー国際理解と平和賞」創設

### 1985年

ポリオ・プラスを発表する

### 1989年

約 50 年ぶりに、ハンガリー、ポーランドに  
クラブができる

### 1990年

モスクワRCが創立

### 1999年

「紛争の解決と平和における国際問題研究の  
ためのロータリーセンター」創設

### 2002年

ロータリーセンターで  
70 人の奨学生が研究を開始

